西崑体の餘派について

高橋明郎

一　序説

西崑体は宋初に盛行した一詩体である。梁昆の『宋詩派別論』[1]に従えば、その「初期」の作者は、楊億・劉筠・錢惟演ら十七人の『西崑酬唱集』に詩を収める詩人（本論文では便宜上この十七人を「西崑詩人」その詩を「西崑詩」と言う）であり、これより遅れる「餘派」の作者は、晏殊・宋庠・宋祁・文彦博・趙抃・胡宿（本論文でも「餘派」と言う）である。

館中新蟬　　劉筠

庭中嘉樹發華滋　庭中の華樹は華を発して滋く
可要螳蜋共此時　螳蜋の此時を共するを要すべけんや
翼薄乍舒宮女鬢　翼薄く乍ち舒ぶ宮女の鬢
蛻輕全解羽人尸　蛻軽く全く解す羽人の尸
風來玉宇烏先轉　風玉宇に来りて烏先ず転じ
露下金莖鶴未知　露金茎に下るも鶴未だ知らず
日永聲長兼夜思　日永く声長くして兼ねて夜思す
背容潘岳到秋悲　背へて潘岳の秋に到り悲しむを容さんや

これは『西崑酬唱集』の中でも有名な七律であるが、対偶が整い、蟬鬢・銅烏・金茎・潘岳の故事を含み、[2]玉宇・金茎という麗字（金・玉・錦などの華美な修飾語）をちりばめる。この対偶・用典・麗字と、近体詩の偏重が西崑体の表現上の特色である。また内容は、男女の情や宮中の華美な生活を詠むものが多い。この西崑体は、内容が乏しいとか技巧偏重であると非難される。ただ、詩の技巧を精密にするという方向では、一つの終着点と言えようし、多数の用事によって、この時代までの中国文化の重層を充分に示しており、すぐれた人工美を持つ詩体でもある。

さて、十世紀末から十一世紀初めにかけての西崑体の流行に続き、梅堯臣や欧陽修により作られる「宋詩」の典型というべき詩が力を持つようになる。この新しい宋詩は、技巧偏重の西崑体の難解さではなく平明さを持ち、内容に

も、花鳥風月の範囲を超えて、日常的なものや社会批判・哲学的議論までを含むものであった。[3]

西崑体から梅堯臣らの「宋詩」への移行は、表現・内容の両面での大転換であったと言えよう。普通、穆修を初めとする反西崑体の流れが、梅堯臣・欧陽修に至って、ついに西崑体を痛撃し西崑体は消滅するという形で、この変化は理解される。しかし、この時期、西崑餘派は晏殊以下健在であるから、本来なら相当の抵抗が有ってよい。にもかかわらず「宋詩」への反発が、少くとも表面上見えないのは何故か。餘派詩の作品が西崑詩と性格を変えたためとは考えられないであろうか。つまり、餘派とは、西崑詩人の李義山信奉を継承し、西崑体を墨守したものではなく、実は「宋詩」に通じる方向に変質したものだったのではあるまいか。そして、詩風の転換点にあって、餘派は「宋詩」と対峙する形をとったのではなく、むしろ西崑体と「宋詩」の中継ぎを果たしたと把えられぬだろうか。

本論文では、こうした観点から、西崑体の餘派を考えてみたい。

二　餘派の詩—西崑体継承の状況

(A)特色の稀釈—晏殊から二宋へ

ⓐ晏殊（淳化二〔九九一〕—至和二〔一〇五五〕）

餘派の作家の多くは十世紀末の十年間に生まれた。中で最も著名なのが晏殊、字同叔である。彼は宰相に至った大官で、咸平六年（一〇〇三）舅の李虚己により楊億に推薦される。時恰も楊億が『冊府元龜』の編集に着手する一年前に当る。今日詩があまり伝わらぬため専ら詞人として扱われるが、生前の一万首をこす詩を作った詩人であった。なお、宋代の詩話・随筆では、[4]彼はしばしば楊劉と名を連ねるが、夙に梁昆の言う如く、年代的に見て、西崑詩人とは分けて考えるべきである。

彼の詩は散佚して数える程しか伝わらないが、『元獻遺文』と『蘿軒外集』[5]に重複を除き二十八首収める。中では『宋詩別裁集』にも取られ「無可奈何花落去、似曾相識燕歸來」なる名句を含む『假中示判官張寺丞王校勘』と「梨花院落溶々月、柳絮池塘淡々風」を含む『無題』[6]の七律二首がよく知られているが、この二首については解説したものもあるので、[7]ここでは別の七律を挙げよう。

初秋宿直

絳河星斗夜闌干　　絳河の星斗は夜闌干たり
禁署沈沈閉九關　　禁署沈沈として九関を閉ざす
上帝冊書羣玉府　　上帝の冊書、羣玉の府
仙人宮闕巨鼇山　　仙人の宮闕、巨鼇の山

涼蟾影度秋陰薄　涼蟾の影度りて秋陰薄く
促漏聲來夜唱閒　促漏の声来りて夜唱閒なり
擁鼻吟多欲愁絶　擁鼻吟多く愁絶せんと欲す
嚴鐘凄斷樹烏邊　厳鐘は凄断す樹烏の辺

宮中の宿直が当時翰林学士の職だった事、詩中の「上帝册書云云」の句から、この詩は、彼の翰林学士時代、中でも『眞宗實錄』の編纂に与った乾興元年（一〇二二）から天聖二年（一〇二四）の間の作である可能性が高い。「上帝册書羣玉府」は『穆天子傳』の「…至于羣玉之山…先王之所謂策府」を典故とする。これは他ならぬ『西崑酬唱集』の題のもととなった典故である。擁鼻吟は謝安の故事による。この詩は麗字こそ用いないが、典故を散らした句作りは西崑詩に近く、用語もかなりの部分（傍点部）で李義山に共通する。この詩が作られた時期、西崑詩人の劉筠が再び翰林に入り晏殊と同職となった。そのためか、この詩は、今日残る晏殊の詩の中でも、とりわけ西崑詩に近い。

晏殊は西崑詩人の一部と同職になり、又楊億・錢惟演らと並べられる程西崑詩に近い作風の詩をものした。しかし、その晏殊の詩ですら、西崑詩と全く同一というわけではなかった。西崑詩人から晏殊に至る段階で、西崑詩の特色の一部が薄められたのである。

まず、晏殊は西崑詩のようにやたらに麗字を付すことを自制している。今引いた詩にも「羣玉府」という語はあるが、これは前述のように典故上の語で、西崑詩人が樹を「玉樹」「瓊樹」などと言うのとは異なる。彼が「余每言富貴、不言金銀錦繡」と言ったというエピソード(8)もこの自制の傾向を物語っている。

さらに、西崑詩人が句毎に典故を置き難解な句作りをしたのに対し、彼はしばしば非常に直截な語で叙景を試みている。例えば「浩露晴方浥、遊蜂暖更喧」（「海棠」）や「梅青麥綠江城道、更與登高望楚鄉」（「春陰」）といった句がそれである。前に引いた「初秋宿直」の頸聯も、「涼蟾」という月を示す少々凝った語を用いつつも、情景自体は決して難解ではない。

晏殊の詩は、このように麗字の多用を避け、用典の頻度をやや減じ、場合によっては平易な表現を用いるという点で、西崑詩の特色を薄めた所に成立している。しかし、こうした変革は詩全体には及ばない。麗字の減少は全篇に共通するが、用典を避けた直截な表現は、一詩の中の一部に用いられるのみである。例えば『無題』は「梨花院落云云」という斬新な句を含みつつ、書き起しは「油壁香車不再逢」という西崑詩風のものであり、『春陰』も、間に平

明な句をおきながら「十二重環閟洞房、悟々危樹俯廻塘」という李義山風の句で始まる。つまり、彼の詩中に変革の芽が含まれてはいるが、それが従来どおりの西崑詩風の句に囲まれているため、一首全体としては西崑詩と似た印象しか与え得ないのである。

従って、彼の詩を革新的と評するわけにはいかないが、わずかとはいえ西崑詩からの分離の芽を示したことは認めねばなるまい。

ⓑ宋庠（至道二〔九九六〕—治平二〔一〇六六〕）

晏殊の示した西崑詩の稀釈という方向は、門人の二宋へと受け継がれる。

宋庠、字公序は、弟宋祁とともに夏竦に認められ、また後に欧陽修の舅となる胥偃にも注目されたが、特に晏殊門下の士として鳴らした。やはり宰相に至った大官である。なお宋氏兄弟は宋授（宣獻公）と血族だが、その宋授は楊億と中表昆弟の関係にあったことが、宋庠の「談苑序」（元憲集巻三七）に見えるから、二宋と楊億も、遠い血縁に当る。

さて、宋庠の『元憲集』には、詩約八百首を収める（うち古詩五十一）。その詩の性格は、西崑詩の性格を、用事・麗字の面で稀釈した晏殊のそれに同じい。そして、この作風は晩年まで変らない。例えば、治平年間に作られたと見られる「京師故僚以余退居近畿賜存問因叙懐自感」（元憲集巻一三）は麗字を用い、文王の台である「靈台」や仙山の「三山」といった場所を詠み込み、頸聯では「茂陵養疾惛々骨，莊室刳心寂々灰」と、司馬相如や荘子の故事を用いている。

彼の絶句も、多くは技巧の跡を留めているか、中には平明なものも見られる。これについては後述する。

ⓒ宋祁[9]（咸平元〔九九八〕—嘉祐六〔一〇六一〕）

宋祁、字子京は既述のように宋庠の弟、『新唐書』の著者で、位は工部尚書に至った人である。晏殊は特に宋祁の才を愛し、祁の翰林学士時代には、旦夕常に会えるよう自宅近くに家を宛がい住まわせたという。[10]

彼の詩は『景文集』と佚存叢書の『宋景文公集』に、重複を除き約千五百首収められている。（うち古詩百十三風雅体詩三）[11]

聞蟬有感三首之三（蟬を聞きて感ずること有り）

勞君驚暮節　君を労して暮節に驚かしめ
助我思流年　我を助けて流年を思はしむ

嘒若横吹管　嘒として横吹の管の若く
繁如未破弦　繁たること未だ破れざる弦の如し
城殘斷外月　城残れて外月に斷き
林暝噪餘烟　林暝くして余烟に噪ぐ
塊坐秋風裏　塊坐す秋風の裏
潘郎鬢颯然　潘郎の鬢、颯然たり（景文集巻九）

劉筠や李宗諤が、やはり潘岳の「秋興賦」を下敷にしているのを除けば、この詩と『西崑酬唱集』の「館中新蟬」との差は非常に大きい。宋祁は麗字を全く用いず、典故も少く、淡々と城や林の蟬を述べるのに対し、「館中新蟬」は「玉樹」「金茎」といった麗字を用い、蟬鬢や武冠といった蟬に関する故事を散らし、舞台も玉宇や斉庭におく。(12)

彼の詩に於ては、麗字の出現頻度が、他の余派の詩人に比しほゞ半減する。(13)これは、彼が晏殊・宋庠に近い西崑詩風の詩を作る一方で今引いたような比較的平易な詩を作ったことによる。晏殊が平易な一句一聯を西崑風の詩の中に織り込んだのと比せば、明らかに、詩中に西崑風の要素の占める割合が減じている。こうした技巧をあまり用いぬ詩は、彼の文集には決して少くない。七律を収めた最初の巻である巻一三を例にとれば、その六十餘首のうち約四分の一がそれで占められる。

このように、西崑詩の特色の稀釈は、宋祁に於て一段と進んでいる。その代わりに詩に別の特色が持ち込まれることとなる。（後述）

(B)性格の保持—胡宿の詩

これまで西崑体の稀釈の例を見てきたが、餘派の総てがこの方向に進んだのではない。

胡宿、字武平（至道二〔九九六〕—治平四〔一〇六七〕）は早くより文名が高く、進士合格の時その詩を見た楊億は「吾恨未識此人」と歎じたと言われる。官は枢密副使に至った。文集の『文恭集』に詩約三百五十首（うち古詩十九）を収める。

咏蟬

柳條高處不須吟　柳条の高処に吟ずべからず
正是螳蜋負異心　正に是れ螳蜋の異心を負へり
已斷清腸悲玉露　已に清腸を断ち玉露を悲しみ
更流哀響入瑤琴　更に哀響を流し瑤琴に入らしむ
長洲苑下風聲急　長洲苑下風声急に
宴曲宮中暮色深　宣曲宮中暮色深し
莫道齊姬無伴侶　道ふ莫れ　斉姫に伴侶無しと
海邊精衞亦冤禽　海辺の精衛も亦た冤禽なり（文恭集巻五）

領・頸二聯の対は整い、玉露・瑤琴という麗字を用い、舞台を呉王闔閭の苑や漢宮に置く。そして斉后の故事（注⑿）や、炎帝の女が東海に溺死し鳥となったという『述異記』の話を典故とする。又、彼の用いた螳蜋・高柳・断腸・玉露・斉姫といっ道具立ては、言葉は必ずしも同一ではないが、[14]既に「館中新蟬」に用いられたものである。

この詩が示すように、胡宿は、この世代の詩人の中で最も忠実に西崑詩の特色を継承したと言える。特に麗字は、既述の三人を上回る頻度で用いられる。用事は時に難解の度を加え、しばしば極度に凝縮された語で示される。典故を縮めること自体は彼の発明ではなく、西崑詩にも「莊櫺」[15]のような語が有るし、宋庠にも皆無ではない。ただ、これらはもとの故事を見てとるのがさして困難ではない。胡宿にも、陶淵明の詩の情景を「陶菊」とするような（「君爲從事東歸」文恭集巻二）これに近い例も有るが、例えば「酌湘吳之醇酎……」[16]は「湘酎」、「黄葛結蒙籠、生在洛溪邊。花落逐水去、何當順流還、還亦不復鮮」[17]という情景は「葛華」の二字に代表させるといった難解なものもある。（いずれも「悼往」文恭集巻三）

前にふれたように、西崑詩は、華麗な技巧の追求という点では一つの頂点に立つものであり、そのために、同じ方向に進歩を求めることは難しかった。晏殊らが西崑詩の特色の稀釈をし別の方向を求める理由もここにあるのであろう。一方、胡宿は逆に、同じ方向へ更に一歩を加えようとしたが、もう発展の余地は、この典故の複雑化以外には、あまりなかったのであろう。彼の詩は、西崑詩より劣るものではないが、しかし餘派として新たに付け加え得たものは、ほとんど無かった。

(C)李義山からの分離

ところで、この他に指摘しておくべきことは、餘派に至って李義山の扱いに変化が生じたことである。

周知の如く、西崑詩人は李義山を宗とし習向を学んだばかりか、その詩句を流用することすら辞さなかった。これは、例の、李義山に扮した優人がぼろぼろの服を纏って現れるという『中山詩話』の有名なエピソードの示すとおりである。『西崑酬唱集』には、李義山の「芭蕉不展丁香結、同向春風各自愁」[18]による「蕉心不展怨春風」（楊億「無題」）や「茂陵松柏雨蕭々」[19]による「茂陵松柏冷蕭々」（李宗諤「漢武」）など、幾つもの例が見られる。

こうした過度の李義山への傾倒は餘派にはもはや見られない。前記の晏殊の詩の用語は、なるほど多く李義山の詩

にも見出せるが、それは単語単位の話で、一句を流用したりすることは全く無い。西崑詩に酷似する胡宿の「咏蟬」も、李義山に重なる言葉をほとんど使っていないのである。

(D)餘派の第二の世代―文彦博

今日西崑体と言われる詩人の中には、さらに遅れて十一世紀初頭に生れた者も含まれる。ここでは文彦博を例に取る。

文彦博、字寛夫（景德二〔一〇〇六〕―紹聖四〔一〇九七〕）は位礼部尚書同平章事に至り、新法施行後の約三十年旧法派の重鎮であった。彼を胡宿・趙抃とともに西崑体に入れたのは王士禎である。[24] 彼は『池北偶談』（巻一四）で「蘅皐」「深院」「秋夕」「登通山閣有懐呈同人」「秋風吟」「寓懐」「閲史有感」（以上「潞公集」巻三）「見山樓小飲偶作」（同巻四）を書き抜き「世猶未知其工妙如此」と称した。

『潞公集』の詩約四百首（うち古詩十二楽府十）は、その大部分が制作年順に並べられていると考えられ、[25] 我々は天聖中葉のものから晩年までを、順にたどってゆける。

井上桐　　幹を擢ずるは瓊蠟に殊なり
託根非嶧陽　　根を託するは嶧陽に非ず
發華臨玉甃　　華を発して玉甃に臨み
傾影覆銀牀　　影を倒して銀牀を覆ふ
方待高朋集　　方に高朋の集ふを待つに
寧客衆鳥翔　　寧ぞ衆鳥の翔くるを客とせん
尾焦期入爨　　尾焦爨に入るを期するに
誰是蔡中郎　　誰か是れ蔡中郎（潞公集巻三）

康定元年（一〇四〇）作と推定されるこの詩では、三聯が対をなし「瓊蠟」（玉の山）や「玉甃」「銀牀」という麗字が用いられている。そうして、「玉甃」や「銀牀」（これらは古くから井戸を詠む時よく用いられる）と桐を組み合わせるのが西崑詩人の普通の発想であったことは、「休沐端居有懐希聖少卿學士」なる陳越の詩の冒頭の一句「玉甃銀牀落碧桐」を見れば分る。嶧陽孤桐、焦尾琴の故事も詠み込まれている。

この詩は、まぎれもなく西崑体の特徴を備えている。しかし慶暦年間から彼の詩は変化する。第一に麗字が極めて少くなる。例えば天聖から康定元年までの詩を収めた巻三、ここには彼の律詩の約四分の一が含まれるが、そこに彼が麗字を用いた詩の半数強が含まれる。第二に詩題が

「公子」「深院」といったものから贈答のそれへと中心を移し、内容も艶詩風のものから、自身の見聞、交流といったものになる。慶暦以後の詩は、このように西崑体から離れるのである。彼を西崑体の詩人と評価する王子禎が、その詩を抄録するに当り、巻四の一詩を除き残り七首を、すべて巻三、即ち康定元年までの初期の作から取っているのは、この意味でまことに暗示的である。

文彦博は、その生涯の一時期西崑体の詩を作っただけであった。このことは彼が梅堯臣や欧陽修とほゞ同世代の作家であることに照らせば納得がゆく。晏殊らの時代が西崑詩人と比較的近接していたのに対し、彼らの場合、その十代に西崑詩人が殆んど没してしまう。彼らは科挙のため西崑体を倣うから西崑体の詩を作ることができた。欧陽修の「井桐」「漢宮」「公子」（居士外集巻一）や梅堯臣の「無題」（宛陵集巻二）などはこの種の作品であり、二人も文彦博と同じ意味で西崑体の詩人であった。しかしこの種の作品は彼らに放棄されてゆく。文彦博の例は、そうした放棄が決して「宋詩」の作家のみの現象ではなかったことを示している。この世代の作家にとり、西崑体はもはや大きな比重を占めておらず、楊億らの西崑体とは全く異質のものになっていたのである。

三　餘派の新機軸

このように、餘派は西崑体の稀釈と保持の二方向へ進んだ。このうち保持の方向は、用典の複雑化を除き、取り立てて言うべき新味を加えていない。しかし、晏殊以下の稀釈の方向では、西崑体の要素を稀釈する代りに、詩は別の要素を取り込みつつあった。

第一は、稀釈という方向の当然の帰結として、表現の平明化である。ただ、それが単に技巧を減ずることに止ればさのみ重要ではないかもしれない。（そこに止り何一つ新味を出せなかった好例が文彦博の慶暦以後の詩である）。が、晏殊の「梨花院落……」は情景を直截に述べ、しかも花庭月などを説明を加えず重ねるという手法で新味を示し得た。この方向は宋庠の絶句の一部に受け継がれる。

碧蘆堂

寂寂虚堂一自幽　寂々たる虚堂は一に自ら幽に
紺梢蒼葉更臨流　紺梢蒼葉は更た流に臨む
不須重畫滄浪境　重ねて滄浪の境を画すべからず
一片江天小様秋　一片の江天小様の秋（元憲集巻一四）

題材自体は新しくないが、結句の簡明な表現は、西崑体と全く別種のものである。宋祁では、絶句のみならず律詩にも平明な詩がしばしば見えることは既に触れた。

第二は題材面の変化である。西崑詩人の好んだ艶詩風の場面、或は花鳥・景物・惜春の情といった伝統的な詩の材料が餘派に於ても主であるが、しかしその枠に留らない。宋庠はここでも聊か保守的で、ほとんど伝統的な詩材に依るが、例えば死んだ馬を詠んだ「傷死馬」（元憲集巻四）は「附尾讒蠅散、投鞍嚙鼠侵」という頸聯の冷徹な描写で目をひく。宋祁となると、自分の憔悴の姿を写した「攬鏡」（景文集巻）や憐の商売によせた「觀鄰人賣餅大售」（同巻二二）など日常の写生も見える。また両人には蛙を詠んだ詩が数首ある。

第三に詩は批判的な目を取りもどす。宋庠・宋祁らも大官の常として時に左遷に遇うわけであるが、宋祁の「雑興」（巻七）はこうした頻繁な異動への皮肉を含んでいる。皇帝が賢人を用いようと迎えの車を出して矢の催促をするが、一月で媚者の讒言のため賢人を外に出す。「留邸月餘罷，君恩詎可恃。召以一人譽，去由一人毀。……」この詩は批判の意をこめながら、しかし例えばかつての韓愈のように自らの不平を声高く喚くことをしない。詩中に表面上宋祁の姿は全く描かれず、河東の賢守の召請と罷免を客観的に述べる形を取っていて、宋人の理性的な面をのぞかせる。

或は「浮屠」（巻七）では、乞食は古より恥とされるのに浮屠は自修と称しこれを行い「歉々常不足，遑々玆有求。……」であると非難する。さらに「歳豐」（巻七）では、天が豊年を降すのは貧士の食を足らしむるためであるのに、「貧士無良疇，安能得嫁穡！工傭輪富家，日落長歎息。爲供豪者糧，役盡匹夫力。……」と批判を展開する。

このように見てくると、いずれの点でも宋祁の方が宋庠より変化の度を加えている。その理由として考えられるのは、まず宋庠が「宋莒公好玉溪詩」（李頎『古今詩話』）と言われるように、個人として李義山への嗜好を残していたことである。そのため、玉溪詩の特色でもある麗字・用事といった性格を分離しきれなかった。従って蛙を詠んでも故事に重点が置かれ、題材のわりに新味に欠ける詩になってしまう。一方、宋祁は「……年過五十，被詔作唐書，精思十餘年，盡見前世諸著，乃悟文章之難也。……因取視五十已前所爲文，赧然汗下。」と言い「余於爲文似蘧瑗。……余年六十始知五十九年非，……每見舊所作文章，憎之必欲燒棄。」[22]と言う。この言からすれば（「文章」には当然詩も含まれようから）宋祁は西崑詩と異った方向へ進むことを強く意識していたようで、そのことが変化を一段と進めさせたと考えられる。なお、この言を聞いて、梅堯臣は「公

文進矣」と評し喜んだというから[22]、彼の文章の変化は、当然梅・欧陽に近い方向に為されたと見てよかろう。

さらに、宋庠の方に酬唱の作が比較的多く、相手も晏殊・宋祁の他、丁度・呉育といった大官が多く、一方宋祁の方は、それより幾分下の階層の者と多く詩のやりとりをしていることも、理由の一つに挙げられよう。西崑詩は、もともと翰林の芸術で、作り手はもとより読み手にも文芸全般の知識を要求する。詩の酬唱の相手が、そうした深い素養を有したか否かが、彼らの詩の性格の決定に関った可能性は無視できまい。

さて、西崑余派は、晏殊・二宋に於て以上のような変化を示したわけであるが、もちろんこの新機軸は彼らの詩の一部に示されたものにすぎない。詩の多くは、やはり西崑詩に近い。稀釈されてはいるが、麗字・用事は宋代の他の詩人に比せばよく用いられるし、それぞれの詩人の所で示したように、近体詩偏重という点も変らない。しかし僅かとはいえ示された彼らの変化が、「宋詩」の典型を樹立した梅堯臣らの変革の一部（即ち日常的題材の採用・社会批判といった点）と似た方向を示している点は注意すべきであろう。

四　餘派と「宋詩」

次いで考えるべき事は、餘派の変化が「宋詩」の影響下に起ったのか、或は逆に「宋詩」の流行に餘派の力が影響したのかという点である。そこで、この両派の交流を見てみよう。

まず欧陽修は、晏殊が知貢挙の時の科挙合格者なので慶暦頃に詩を宛てている。ただ、詩がもとで関係が悪化し[23]、以後あまり交わらない。宋庠とは詩の上で没交渉であり、宋祁とも景祐年間に共に詠んだ詩が一首あるのみである。胡宿が景祐三年の欧陽修の左遷に当り、しばしば送別の宴に出ていたことは「于役志」から知れるが、詩となると慶暦元年胡宿が知湖州として赴任するのを送るものが一首あるのみである。そしてこれも、胡宿との交流の深さを示すものというより、胡宿の下役になる梅堯臣への配慮によるものである。餘派の文集にも欧陽修に宛てた詩は無い。

梅堯臣は宋庠に一首、胡宿には胡州で彼の下で仕事をした時期にのみ十一首、宋祁には十首の詩を宛てている。しかし、餘派の中で梅氏が最も深く交ったのは晏殊であろう。

この二人の交流は慶暦六年（一〇四六）に始まる。この年梅堯臣は刁氏を娶り許昌へ向う途上、知潁州の晏殊と会見し詩の酬唱を行う。その「依韻和晏相公」（宛陵集巻一

六）で、梅氏は詩の目標が「平淡」であると明言し、一方晏殊は、梅詩を陶潛・韋応物に準え賞揚した。慶暦八年には晏殊は部下として梅堯臣を召した。梅堯臣がこの年作った擬古体詩に、陶潛・韋応物という晏殊の好む詩人に擬したものがあることは偶然ではあるまい。又皇祐二年にも晏殊に詩を宛て、至和二年には彼の挽詩を書いた。[24]

今見たように、餘派と梅・欧陽との交りは必ずしも盛んではなかった。比較的よく交ったのは晏殊だが、彼と梅・欧陽との関係は、科挙を除き慶暦年間以後のものである。そして、今述べたように、慶暦六年梅堯臣と会見する時期には、晏殊は既に陶潛や韋応物への愛好を有していた。このことから、晏殊の変化は梅・欧陽と関りなく進行していたと分る。さらに、宋祁は自己の文章の変化を述べるに当り、前代の文章に触れたためとのみ言い、梅・欧陽らについて特に言及していない。

つまり餘派の変化は新興の「宋詩」の影響を受けて起ったものではないのは分った。では餘派が「宋詩」に影響を与えたのかというと、直接には無かったと考えられる。例えば晏殊の梅堯臣への評価は「平淡」という一点にのみ向けられ題材の拡張などの点には及ばない。これは晏殊の詩の変化が、平易化という点のみで、題材の拡張や社会批判の面は門人の宋祁の代で出てくることを考えれば当然である。銭惟演以外に大官の厚遇をあまり得られず、例えば范仲淹にしばしば詩を奉っても、この高官から色よい見返りをついに得られなかった梅堯臣にとり、晏殊のような文名ある大官の推賞は大きな意味を持ったかもしれないが、[25]それにより梅詩の革新的性格が増すという類のものではなかった。その他の餘派と梅・欧陽との交流が疎であったのは、既に見たとおりである。

しかし間接的には影響が有ったと見られる。西崑詩人の中で最も長く生きのびた銭惟演が景祐元年（一〇三四）に没した段階で力を有するのは餘派で、欧陽修らはまだ微力である。ようやく政治的に活躍し始める慶暦年間でも、欧陽修は知制誥であるが、晏殊宋庠は宰相、宋祁も翰林学士に昇っている。[26]こうした文名も政治力もある高官が西崑体を墨守していれば、「宋詩」の流布の大きな障害となった筈である。彼ら餘派が西崑体を変化させ、そこに「宋詩」に通ずる幾つかの性格を加えつつあったから、後発の梅・欧陽らの動きを排さなかった。もし晏殊が西崑体を頑強に奉じる作家であったら梅詩を推賞することは無かったであろう。こうした餘派の側の容認があってこそ、詩の世界での「宋詩」の地歩は安定する。餘派が西崑体を墨守し、梅

・欧陽が西崑体からいきなり改革を進めるとなれば、大きな衝突混乱となったであろう。しかし餘派が変革の芽を有したことで緩衝地の役を果たし、ために詩の転換がスムーズに行われたと言えるのではないか。

さらに考えられるのは、西崑体を稀釈してゆく餘派の方向に、梅・欧陽の改革に通じる芽が有ったのであれば、梅・欧陽の改革も、西崑体に真向から対立する形で生じたのではなく、実は西崑体の稀釈の延長上に生まれたのではないかという可能性である。梅・欧陽と同時に生まれた文彦博が早く西崑体から離れたように、梅・欧陽も西崑体から餘派より年令的に早い時点で分離し、そのため余派が西崑体を稀釈しながら芽としてしか有せなかった変革を、より徹底できたのではないか。こう考えることで、彼らの初期の詩に於ける西崑詩的性格の残存、或は欧陽修が石介と異り西崑詩人を完全に否定しなかったことが説明できよう。

五　結　語

以上をまとめれば、餘派は西崑体の特色の保持と稀釈の二方向に分れ、特に晏殊・二宋という稀釈の面では、「宋詩」の変革に通じる芽を有していた。つまり餘派とは、決して西崑体を継承しただけの存在では無かった。欧陽修らは、これらと対決したというより、むしろ餘派の変革の芽を徹底させた人々と理解できる。

晏殊や二宋の詩は、稀釈された分、西崑詩の極致と言うべき人工美に及ばず、逆に題材の多様化や平明といった点では梅・欧陽に及ばぬという、詩としては不徹底な存在である。しかし、梅・欧陽と通ずる変革の芽を有したことは、詩の革新を容易なものとした。西崑体と「宋詩」とを結ぶ架橋としての文学史上の役割は、小さくないと言えよう。

なお、西崑体との関連に留意し、梅・欧陽の詩を年代順に見れば、餘派の意味をより確かに把握できようが、この点は後の機会に譲る。

（筑波大学大学院）

〔注〕

(1)東昇出版事業公司（台北・民国六九）刊による。

(2)魏の文帝の宮人が蟬の翼の如き鬢、所謂蟬鬢を作ったこと、崔豹の『古今注』巻下雑注第七（玉函山房輯佚書所収）に見える。銅烏は測風機で『西京雑記』に見える。金茎は『西都賦』に出てくる銅の柱、末句は潘岳の『秋興賦』による。

(3)梅堯臣らの呼称は「慶暦」（『宋詩紀事』序）「古文詩体」（梁昆前掲書）など一定しない。本論文では梅堯臣・欧陽修らの詩体を、便宜上「宋詩」と称する。

(4)梁昆前掲書P.二五

(5)前書は四庫珍本叢書七集、後者は同六集の『両宋名賢小集』所

収。

(6)『蘿軒外集』は『寓意』と題す。

(7)村上哲見『宋詩』(筑摩書房) P.一二、前野直彬編『宋詩鑑賞辞典』(東京堂出版) P.三

(8)呉処厚『青箱雑記』(稗海全書二一—二三)

(9)宋庠・宋祁を「晩唐体」とする見解もあるが(胡雲翼「宋詩研究」香港商務印書館一九五九・P.一一三)、二人の詩には西崑体の性格が残存し、また晩唐派の嫌う用事も少くないから、妥当とは言えまい。

(10)蔡条『西清詩話』(説郛弓八一)

(11)『詩経』の風雅のスタイルに倣ったもの

(12)「蟬髪」は注(2)参照。「武冠」は侍臣の冠で文様が蟬に似ていた。「斉庭」は馬縞の『中華古今注』巻下牛亭問蟬(叢書集成所収)の、斉后が死んで蟬に化した話に因む舞台設定である。

(13)今逐一数字を挙げぬが、例えば宋祁は七・八首に一首の割で麗字を用いているが、胡宿では二・三首に一の割合である。

(14)断腸は回腸、玉露は珠露となっている。

(15)『荘子』肖遙遊の樗の話に基く。

(16)謝恵蓮「雪賦」

(17)楽府「前溪歌」七首之六(『楽府詩集』巻四五)

(18)「代贈」(『李義山詩集』巻六)

(19)「茂陵」(『李義山詩集』巻五)

(20)「世人謂:"宋初学西崑体有楊文公、銭思公、劉子儀",而不知其後更有文忠烈、趙清献、胡文恭三家。其工麗妍妙,不減前人。……」(『漁洋詩話』巻中)

(21)いま試みに巻四冒頭の詩を考える。(番号は詩の順序)

①某天聖四年叨充郷賦明道二年夏仮副車於本郡今年夏黍外計於本道……因成拙詩二章題於行署

⑩小園即事

⑪宮保相公以某於貝之役与有労焉及聞非才忝爰立之命貽詩加挺……輒成拙悪一章以達謝意

⑫題高平公親書伯夷頌巻後

⑬春日湖上偶作

㉑予移守青社同年宋学士代予守璧田会有来詩因成四十言為答

㉒答南郡致政太傅相公

㉓偶題看山楼新画山水

㉔太原府統平殿朝拝

㉕寄太原韓太尉

①の題下注に「前此三年先大夫河東転運使」とあり、一方巻三「長平懐古」の題下注には「康定元年任河東転運副使」とある。よって①は慶暦二年頃の作と推定できる。次に⑪は慶暦八年文氏が河北宣撫使に任ぜられ貝州征伐へ向う時の作。⑫は題下注に「范自青州書寄許下」という。范仲淹は皇祐二年から四年まで知青州だったから、この時期の作。㉑は文彦博の知青州時代(皇祐四—五年)の作。㉕は題下注に「時建忠武節尹京兆、韓以武康節尹太原」とある。『続資治通鑑長編』は「(皇祐五年正月)壬戌韓琦自定州加武康軍節度使知并州」「(皇祐五年十月)戊甲新知秦州文彦博知永興」というから、㉕は皇祐五年の作。(京兆尹と知永

興は同職）つまり、

①慶暦二（一〇四二）⑪同八（一〇四八）⑫皇祐二―四（一〇五〇―五二）㉑皇祐四―五（一〇五二―五三）㉕皇祐五（一〇五三）

となる。このように年代の順に並び転倒がない。これは、ここだけでなく巻三から巻六に通じて見られ、このことから『潞公集』の詩は制作年の順に配されていると考えられる。さらに、⑬や㉓のように制作年のはっきりしない詩も、前者は⑫と㉑の間なので皇祐四年頃、後者は㉑と㉕の間で皇祐四年から五年の作という決定も可能である。但し巻七では、元豊元祐間の詩でまとめられているものの、細い年月では幾つか転倒が見られる。

㉒『宋景文筆記』（『学津討原』一三所収）

㉓彼の「晏太尉西園賀雪歌」（『居士外集』巻二）をめぐる晏殊とのいきさつは、『臨漢隠居詩話』や『潘子真詩話』に見える。

㉔梅堯臣の詩の制作年は、朱東潤の『梅堯臣集編年校注』（上海古籍出版社・一九八〇）による。

㉕朱東潤は、この時期、梅堯臣が晏殊の影響を強く受けたという。（「梅堯臣詩的評價」中華文史論叢第七輯）

㉖慶暦年間、晏殊は枢密使、後同中書門下平章事兼枢密使、宋庠は参知政事、宋祁は翰林学士、翰林侍読学士兼竜図閣学士などに任ぜられた。欧陽修が翰林に入るのは、これよりほゞ十年以上後である。